備後国分寺跡第２次発掘調査概報

１　９　７　４

広　島　県　教　育　委　員　会

備後国分寺跡第２次発掘調査概報

目　　次

Ⅰ　はじめに……（1）
Ⅱ　調査の経過……（1）
　1．既往の調査……（1）
　2．発掘調査の経過……（2）
　3．発掘調査日誌……（4）
Ⅲ　検出の遺構……（6）
　1．南方建物基壇（推定南大門）……（6）
　2．東方建物基壇……（7）
　3．北方建物基壇……（8）
　4．その他の遺構……（9）
Ⅳ　出土の遺物……（10）
　1．瓦　　類……（10）
　2．その他の遺物……（13）
Ⅴ　まとめ……（15）

凡　　例

Ⅰ　本概報は、昭和48年12月10日から昭和49年１月26日までの間、実施した備後国分寺跡の第２次調査概報である。

Ⅱ　発掘調査は、文化庁から補助金の交付を受けた広島県教育委員会が実施した。

Ⅲ　本概報の執筆は、河瀬正利、鹿見啓太郎、桧垣栄次の分担により、河瀬が編集した。

Ⅳ　航空写真測量図については、昭和49年３月に完成予定のため、付図は、既存の3000分の１地形図（神辺町作成）を拡大訂正して使用したものであり、距離等について必ずしも正確ではない。

Ⅰ はじめに

備後国分寺跡の発掘調査は、文化庁から補助金の交付を受けて昭和47年度から実施しているものである。昭和47年度には、調査費 100万円で第１次の調査を行なったが、本年度は、第２次調査として文化庁の補助金 150万円、県負担金 150万円の計 300万円の費用で昭和48年12月10日から昭和49年１月26日までの33日間実施した。本寺跡の存在する広島県深安郡神辺町一帯は、県東部の新工業都市福山市の衛星都市として近年、急速に宅地化が進んでいる地域である。このため、寺跡周辺も漸次住宅が建築されてきており、寺域確認を早急に実施しなければならない状況となっている。

第１次の調査では、現国分寺参道西側から建物跡１棟を検出することができた。しかし、付近は北方の大原池決壊のとき押し流された砂や岩が相当厚く堆積しているためと調査費に限度があったため他の遺構については明らかにできなかった。

本年度行なった第２次調査では、南方建物跡、東方建物跡、北方建物跡などの遺構を検出することにより重要な遺跡であることを確認した。また寺跡を中心とする約60,000㎡について航空写真測量を実施した。

調査にあたっては、つぎの調査員で実施した。　潮見浩（広島大学助教授・広島県文化財専門委員）、川越哲志（広島大学文部教官）、松下正司（県教委文化財保護室専門員）、河瀬正利（県教委文化財保護主事）、鹿見啓太郎（同指導主事）、桧垣栄次（同）、この他、神辺町教育委員会、横山宗司、徳永友之、今本隆司、古田典一氏をはじめとする土地所有者の方々から多大な協力をうけた。記して謝意を表したい。

（河瀬　正利）

Ⅱ 調査の経過

１．既往の調査

備後国分寺の寺域や伽藍配置については、今まで何一つあきらかにされていなかったといってよい。これは、現国分寺北方の大原池が延宝元年（１６７３）の豪雨のため決壊し、国分寺の堂塔を一夜のうちに埋没させてしまったためと考えられている。しかし、昭和のはじめごろから地元の郷土史家達により、付近から瓦類や礎石が採集されたり、字名調査などが行なわれ、現国分寺参道をほぼ中軸線とする伽藍配置が想

定されてきた。その後、昭和40年以降にも出土した瓦類の整理、分類が行なわれるなど国分寺に関する調査と研究が徐々に進められていた。ところが、昭和47年に寺域内と考えられるところにある墓地の拡張計画が出されたため、広島県教育委員会は、直ちに文化庁と協議し遺構確認のための第１次発掘調査を同年12月より実施した。

第１次調査では、第１区から第８区までの８か所の調査区を設定して調査した。その結果、第１・３・４・５・６区から基壇建物跡１棟を明らかにした。高さ約40cmの基壇は、規模が東西30m、南北20m前後であることから金堂ないしは講堂跡と想定された。また、寺域北縁確認のための第２・８区では、地表下約 2.5m まで砂と岩が推積しており、遺構は検出できなかった。この結果、寺域の北縁は、当初の予想よりかなり南へ寄っていることが想定された。

以上のように昭和47年度の調査では、基壇建物跡１棟を検出するにとどまったが、この建物跡は、伽藍の中心的建物跡と推定されるなど重要な遺跡であることが明らかになったため、町有地としてこの地域の保存がはかられることになったのである。

２．発掘調査の経過

昭和47年度に実施した第１次発掘調査では、部分的であるが基壇建物跡１棟を検出することができた。今回の調査では、昨年検出した建物跡の東側および北側の建物遺構確認と寺域の四至を明らかにすることを主眼にし、第１区から第12区までの12か所のトレンチを設定し、発掘面積は約 300㎡であった。

まず、寺域南辺を確認するため現国分寺参道入口西側の荒地に南北方向の第１区（19×３ｍ）を設定した。この区では、地表下に砂層、青灰色粘土層、褐色土層と続いていたが築地などの遺構は確認できなかった。第２区（23×２ｍ）は、参道入口を中心に門関係の遺構検出のため第１区南端より東へ向けて設定した。この区は、以前に家屋が建っていたため地表面は、固く踏みかためられていたが、地表下に砂層、青灰色粘質土、茶褐色粘質土の地山となっていた。調査区東端より西側８ｍのところで地山が西へ落ちこんでおり、削り出し基壇の西面の一部と想定された。この区の中央部付近では、瓦類とともに土師質土器多数が出土し、また削り出し基壇西面近くから掘立柱穴跡が検出されるなど室町期ごろに攪乱されたものと考えられた。この基壇は、付近の状況からすると南大門跡とも考えられたため参道ぞいに南北に第11区（７×１ｍ）を設定したところ、トレンチ南端より 2.6m で地山の茶褐色土が北へ落ちこんでおり、しかもこの北側には幅１ｍ、深さ20cmの溝状の堀りこみがあることからすると

基壇北面と推定できた。ここではとりあえず南方建物基壇と呼称することにした。第3区は、以前に礎石や瓦類が出土したといわれる参道東側墓地の南に設定した（13×1.5m）。約50cmの砂層の下に旧地表面の青灰色粘質土、焼土層（炭化物、焼けた瓦、すすけた瓦を多量に含む）と続き、その下が基壇と想われる版築土となっていた。この区の中央西よりの基壇上から上面の平坦な石が2個検出され礎石と考えられた。この基壇築成の時期は、出土する瓦からみて室町時代ごろと推定されたが、規模・性格は明らかでなく一応北方建物基壇と呼称した。なお、調査区中央付近や礎石の周辺から人骨埋葬の円形土坑が5基発見されたが、副葬されている土師質土器、陶磁器からみて江戸期のものと推定された。第4・5・6区は、昨年の調査で検出した建物跡の東側の遺構確認のため参道東側の畑に設定した。

第5区（20×2m）、・第6区（12×1m）では、中央部で基壇と考えられる版築土が東へ傾斜することが明らかにでき、建物基壇の東面と想定されたのでとりあえず東方建物基壇と称した。しかし、規模や性格については明確にできなかった。第7区（10×2m）・第8区（11×2m）は、第1次調査検出の建物跡の北側に設定し、寺域の北縁を明らかにしようとしたが、両区とも地表下は約60cmの砂層、青灰色粘質土、褐色土、黒褐色土、黄褐色土（地山）と続いており、この褐色土の中に瓦が含まれていた。寺域の北縁は明らかにできなかったが、部分的に瓦が集中して出土するところがあり、付近に何らかの建物跡の存在が想定された。第9・10区（42×1m）は、寺域西辺を確認するため堂々川の西側に設定した。この区付近では、砂の堆積は比較的少なかったが、調査区東端から西へ約13mと17mのところで、南北へ続くとみられる溝状遺構2本を検出した。このため第9区の南側に第12区（7×1m）を設定し、この溝の繋がりを追ったが、第12区からは、第9区東側の溝に続くと考えられる溝を1本のみを確認することができた。この溝状遺構は、寺域西辺近くの建物に関係するものと想定されたが明らかにはできなかった。なお、この調査区では、瓦の出土は少ないが、土師器・須恵器片がかなり出土した。

（河瀬　正利）

3．発掘調査日誌

1973年（昭和48）

12月10日　月曜日（晴れ）

道具を積み、神辺へ向う。神辺へ到着し、町教委、土地所有者へあいさつ。

12月11日　火曜日（晴れ）

寺域南端の確認のため、第1区設定。排土作業にかかる。

12月12日　水曜日（晴れ）

第1区―砂層下の青灰色粘土層より溝状遺構検出。江戸時代の水害時の地形を示すものか。

12月13日　木曜日（晴れ）

第1区―砂層下を掘り続ける。つぎに第1区より東へ第2区設定。排土作業にかかる。砂層下より、少量の遺物出土。写真撮影。

12月14日　金曜日（晴れ）

第2区―青灰色粘質土を掘り下げる。この下層には、瓦を含む黒褐色土が検出された。トレンチ東側で、基壇状の遺構検出。

12月15日　土曜日（くもり）

第1区―西側半分を掘り下げるが、著変なし。

第2区―基壇状遺構清掃。

12月17日　月曜日（くもり）

第1区―前日に引き続き、西半の排土作業続行。黄褐色土層下より瓦の集積状態を確認。

第2区―土師質土器がかなり出土する溝状遺構を検出し、清掃。写真撮影を行なう。つぎに建物基壇西面の確認のため南北に拡張する。

航空測量用基準点設置。

12月18日　火曜日（晴れ）

第1区―発掘続行。北寄りに基壇状の高まりを検出。さらに径70～80cmのpitを検出したが、瓦の量などから建物の基壇の可能性は少ない。瓦集積の写真撮影。

第2区―建物基壇の西端の確認のためトレンチを南北に拡張。斜めに落ちていることを確認。

第3区―国分寺墓地南端に設定。排土作業にかかる。砂の堆積が多い。

12月19日　水曜日（晴れ）

第1区―西壁を掘り下げ、断面観察。

第2区―基壇をより詳細に見るため遺物をとりあげ、基壇面を削る。

第3区―砂層下より礫石と思われる石を検出。その周囲より人骨多数出土、以前墓地であったことを確認。東側では、焼けた瓦出土。

第4区―参道東側の畑に設定。排土作業にかかる。

12月20日　木曜日（晴れ）

第1区―断面実測。写真撮影。

第3区―礫石の掘り方を確認。基壇版築は黒色土と黄白色粘質土の瓦層になっており、上面には焼けた瓦が多く堆積している。天文7年に火災にあった建物の基壇かもしれない。

第4区―排土作業

12月21日　金曜日（晴れ）

第1区―埋め戻し。

第2区―写真撮影。

第3区―写真撮影。断面、平面実測。

第4区―砂層下に溝状遺構が検出されたが、瓦の状態からみて、寺院遺構は無いものと考えられる。

12月24日　月曜日（晴れ）

第1区―埋め戻し。

第2区―西よりでトレンチ半分を下へ掘り下げ、断面を観察し実測する。

第3区―埋め戻し完了。

第4区―西側を深く掘り下げてみる。第1区、第2区付近の平板測量。

12月25日　火曜日（晴れ）

第2区―平面実測。第1区とともに埋め戻しを行なう。

第4区―西壁断面実測。埋め戻しを行なう。

出土遺物洗浄。

12月26日　水曜日（晴れ）

第1区・第2区―第2区の基壇部を残し、埋め戻し完了。出土遺物洗浄。本年の調査を終え、来年の調査に備え道具類の整理。

1974年（昭和49）

1月7日　月曜日（晴れ）

第2回目の調査のための準備完了。

1月8日　火曜日（晴れ時々くもり）

第5区―第1次調査で検出した建物基壇の東側畑に設定。排土作業にかかる。旧耕土層の下に瓦が出土しはじめる。西側より基壇状の黒褐色土が検出される。中ごろで土塁状の高まりが検出される。3か所で瓦の堆積がみられる。

1月9日　水曜日（晴れ）

第5区―清掃。

第6区―基壇状遺構の延びり確認のため設定、排土にかかる。東側へ2段の落ち込み検出。

第7区・第8区―参道西の果樹園に設定。排土作業。若干の瓦と土師質土器出土。

1月10日　木曜日（晴れ）

第5区―北壁断面実測。

第7区―排土を続行。瓦の包含層が検出されたが、

遺構は検出されない。

第8区一排土作業。北側では、大石が多数あらわれ発掘不可能となる。南側で砂層を除く。

1月11日　金曜日（晴れ）

第7区一砂層下を掘り下げる。砂層下層より瓦を包含する層があり、さらにその下は弥生式土器の包含層が検出された。　瓦量から付近に建物が想定される。

第8区一第7区と層の状態は似ている。北側で岩石が集中しており排土作業不可能となる。

第5区・第6区一基壇状の固い土を掘り下げる。土盛状の遺構と基壇状の遺構は同一のものと考えられる。

1月12日　土曜日（晴れ）

第5区・第6区一基壇状の固い土を掘り下げ、東端の検出を行なう。東限が確認できたが、版築の始まりが判別できない。

第8区一黄褐色土層まで掘り下げるが遺構は検出されなかった。

第9区一寺域の西限をつかむため、宮ヶ川西に設定。排土作業にかかる。

1月14日　月曜日（晴れ）

第7区・第8区一断面実測。

第9区一排土作業続行。若干の瓦片、土器片が出土するが、遺構は検出されない。

瓦洗浄。

1月15日　火曜日（晴れ）

第5区一基壇東端の版築土の始まりを検出。東側に溝状遺構検出。

第8区一瓦をとりあげ、地山まで掘り下げる。北側の岩石のない部分を地山まで掘り下げる。南側でピットを検出したが、柱穴とは考えられない。

第9区一地山まで掘る。さらに、トレンチを西に拡張。瓦、須恵器出土。

1月16日　水曜日（晴れ）

第5区一基壇断面図、平面図作成。写真撮影。

第6区一断面図作成。

第7区一埋め戻し。

第8区一地山まで掘り下げる。瓦の出土量より付近での建物跡が予想される。

第9西区一南北方向の溝を検出。瓦出土量より集地の可能性あり。第9区の西へ第10区設定。

1月17日　木曜日（晴れ時々くもり）

第5区一基壇東端実測。平板測量。

第7区・第8区一埋め戻し完了。

第1区・第2区の平板測量完了。トラバースを組む。

1月18日　金曜日（晴れ）

第2区一基壇の断面を観察したところ、地山を削り出したものと思われる。

第10東区一排土作業。

第11区一参道入口に設定。排土作業にかかる。

1月19日　土曜日（晴れ）

第11区一排土作業。地山面を検出の結果、基壇の北端がつかめ、この北は溝状の落ち込みとなっていることを確認。現地説明会実施。

1月21日　月曜日（雨）

遺物洗浄。

1月22日　火曜日（晴れ）

第5区・第6区一埋め戻し完了。

第9区一溝を掃除。ピットを掘り下げる。

第10西区一排土作業。

第11区一トレンチ拡張。

1月23日　水曜日（晴れ）

第9区一断面図作成。溝の平面実測。東側埋め戻し。

第10東区一中央部に焼土あり。中に弥生式土器を含んでおり、住居跡の可能性がある。

第11区一地山面を検出。断面図、平面図を作成し、平板測量を実施。

第12区一第9区の南に設定。排土作業にかかる。溝を検出。第9区の東側の溝に続くものと思われる。

1月24日　木曜日（晴れ時々くもり）

第9区・第10区一断面図作成。第10区西側を埋め戻す。

第11区一写真撮影後、埋め戻し。

第12区一平面図、断面図作成。

遺物洗浄。

1月25日　金曜日（晴れ）

第9区・第10区一埋め戻し。

第12区一トレンチを東へ拡張。排土作業。

第9区・第10区・第12区付近の平板測量。遺物洗浄。

1月26日　土曜日（晴れ）

第12区拡張区一発掘続行。東側で落ち込みが検出され、床面に炭化物の層と弥生式土器が出土し住居跡と想定されたが、来年度以降に調査することとし以上で今年度の調査を終え、地元協力者へのお礼、道具、遺物の整理の後、広島へ向う。

（桧垣　栄次）

Ⅲ 検出の遺構

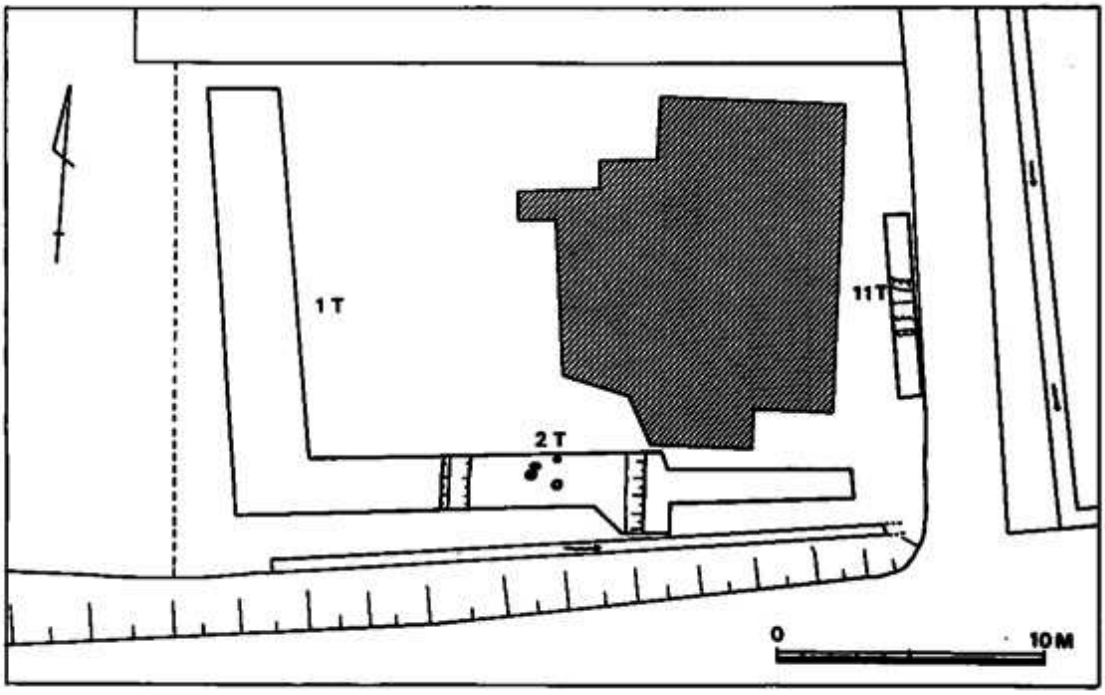
今年度の調査で検出した主な遺構は、基壇建物跡３棟、溝状遺構１か所である。しかし、検出した建物は、性格・規模が明らかでなく検出した位置からとりあえず南方建物基壇、東方建物基壇、北方建物基壇と仮称した。

今のところ寺域の四至を想定できるだけの遺構は検出されなかったが、堂々川西側から南北に続くとみられる溝状遺構が発見されたことから、今後の調査によって寺域西辺を明らかにできるかもしれない。

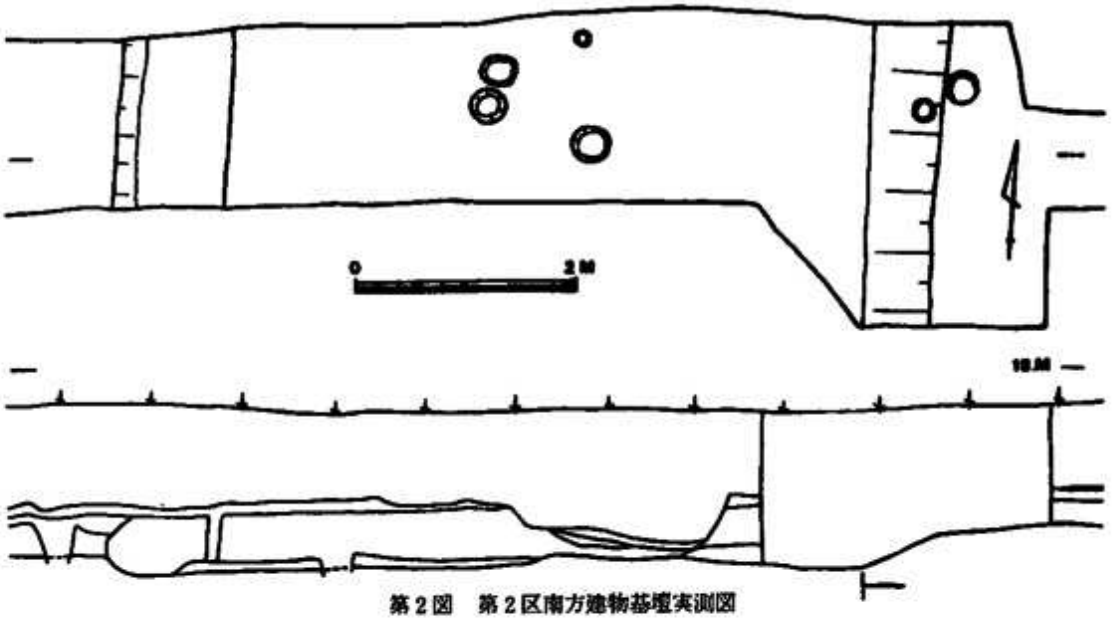
また、地形的にみると、現国分寺参道入口に南接し東西に走る県道は、往古馬往還とよばれ延喜式の山陽道といわれることから伽藍地は、この県道以北に限定されるものと推定される。

１．南方建物基壇（推定南大門）

この建物基壇は、現国分寺参道入口附近に設定した第２調査区および第11調査区より検出された。基壇は、地山である赤褐色粘質土を削り出して築成している。第２区



第１図　南方建物基壇付近地形図



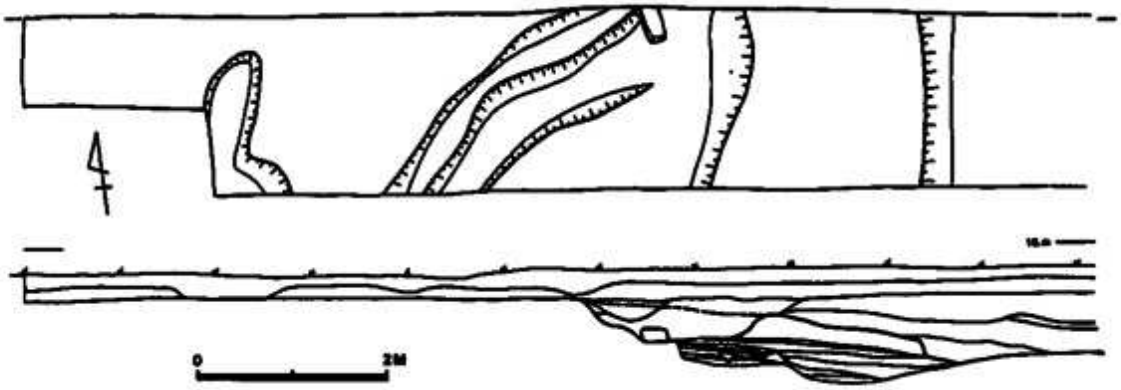
第２図　第２区南方建物基壇実測図

では、南側の県道と北の廃屋があるため、わずかに南北方向に 3.8ｍを確認できたにすぎない。基壇は東から西へ約40度の角度で傾斜しており、基壇西面の一部と推定されたが、地覆の石などは遺存していなかった。現在の基壇高は30cm、主軸は、検出基壇が短いため断定はできないが現在、磁北より１度西に偏している。

また、基壇上で礎石なども検出できなかった。基壇北面は、第11区から検出された。参道わきのため調査幅は１ｍに限られたが、調査区南端より 2.6ｍのところで基壇土となっている地山が北へ傾斜しており北面と確認できた。北辺の北側は、幅 1.2ｍ、深さ20cmの溝状の落ちこみがあり、雨落溝かもしれない。本基壇の北側は、廃屋・南側と東側は道路があるため、規模を明らかにすることは困難であるが、地形的に南側の県道が寺域の南限と推定されることからすると南大門跡の可能性が大きいといえよう。ただ、南大門跡であれば、両側にとりつくべき築地跡が、第２区基壇西面部分からも検出されず疑問として残るので今後他地域の調査とも相まって明らかにしていきたい。

２．東方建物基壇

第１次調査で検出した基壇建物跡に関連するものと考えられる東側遺構の確認を行なった。現参道より約40ｍ東の畑に東西方向に２か所の調査区（第５区・第６区）を設けて確認した。この付近は、砂の堆積は少ないが、後世の耕作等のため溝状の掘り



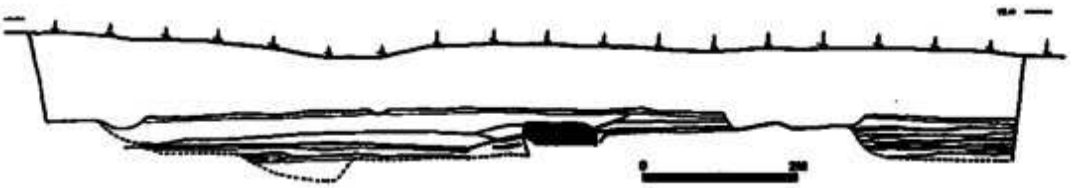
第３図　第５区東方建物基壇実測図

こみや大きな円形の坑があるなど相当攪乱されていることが判明した。２か所の調査区は、耕作物等のため面積を限定せざるをえなかったが、調査によって基壇の東面を確認した。発掘区内では、礎石や地覆石、雨落溝などは全く検出されず、基壇積土もかなり削りとられていた。基壇積土の下半部は、黒褐色ないし茶褐色で厚さが５～10cmの粘質土、砂質土が互層をなしていたが、その上は、黒褐色でやや砂質の土でもって固くたたきしめられていた。このことからすると上半の黒褐色積土は、あるいは後補のものかもしれない。基壇積土より下の地山は、基壇東面付近から西へ約20cmほど掘りこまれており、地山を掘りこんだのち基壇土を段築したものと推定できた。

この東方建物基壇については、規模、性格などは全く明確にしがたいが、基壇の東面であること、また、第１次調査検出基壇のほぼ真東に位置することなどが確認できた。次年度以降の調査で明らかにしていきたい。

３．北方建物基壇

昭和のはじめ礎石や古瓦が出土したといわれる地域の遺構確認を行なった。参道東側に接してトレンチを設け、調査したところ基壇建物跡を確認した。付近には、１ｍ以上の砂の堆積があり、しかも後世の人骨埋葬等の攪乱のため相当削平されており、基壇端は確認できなかったが２個の礎石を検出した。基壇積土は、厚さ５～10cmの黒褐色および茶褐色の粘質土が互層となっていた。東西の礎石は、この基壇面に掘りこまれた0.8×1.0ｍの掘り方の中にすえられており西側のものが0.6×0.9ｍのほぼ長方形、東側のものは0.7×1.0ｍのやや円形を呈し、上面は平坦であった。柱間は、３ｍ(約10尺)であり、基壇も東西棟を想わせたが明確にはできなかった。



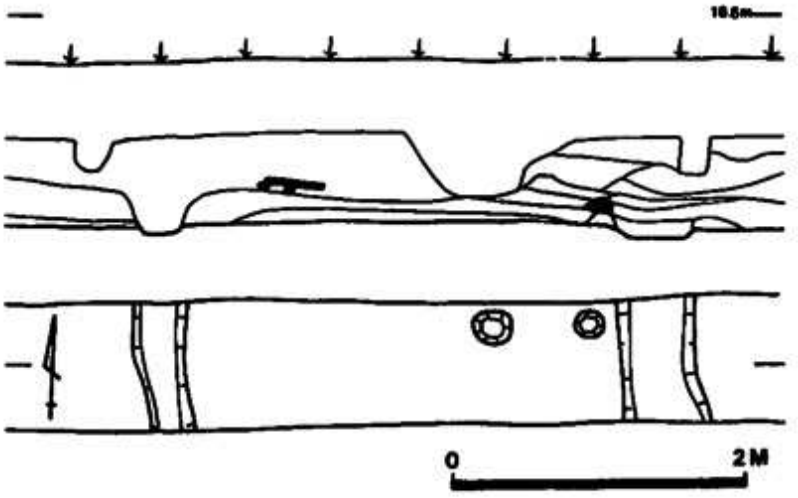
第４図　第３区北方建物基壇断面図

本基壇建物は、基壇上に焼けた瓦や炭化物が堆積しており、瓦も室町期に比定されるものであることから、その時期のものと推定された。軒丸瓦の瓦当に「薬」の字があることは、薬師堂でもあったのであろう。

４．その他の遺構

国分寺参道入口より西側約 130ｍのところで南北に続く溝状遺構を確認した。当初の予想に反し、この付近には砂の堆積は少なく地表下約１ｍで茶褐色の地山となることが判明した。溝状遺構は、第９区で約 3.5ｍの間隔で東西に２本存在した。いづれも地山に堀りこまれており、幅は20～40cm、深さ10cm前後と小さい。この溝状遺構については、第１・２区では、東側の溝に続くと想われる溝を確認できただけであり、明らかにできず、次年度以降の調査によりたいが、寺域の西面築地に関連するものかもしれない。

（河瀬　正利）



第５図　第９区溝状遺構実測図

Ⅳ 出土の遺物

出土した遺物には、瓦類、土器類、石器類、金属器類があるが、量的に多いのは瓦類である。瓦類では、軒丸瓦、軒平瓦があるがほとんどは平・丸瓦である。土器類では、須恵器、土師器のほか寺跡下層から弥生式土器、遺構面上から土師質土器が出土している。また、石器、金属器類もあるが、その数は少なく、現形をうかがえるものも僅かである。ここでは瓦類を中心に主な遺物についてのみふれておきたい。

1．瓦　類（第6図）

今次調査では各調査区全域にわたって軒丸瓦、軒平瓦をはじめ丸瓦、平瓦等が検出出された。しかし国分寺の創建以来度重なる被災を物語るものか完全な形で出土した

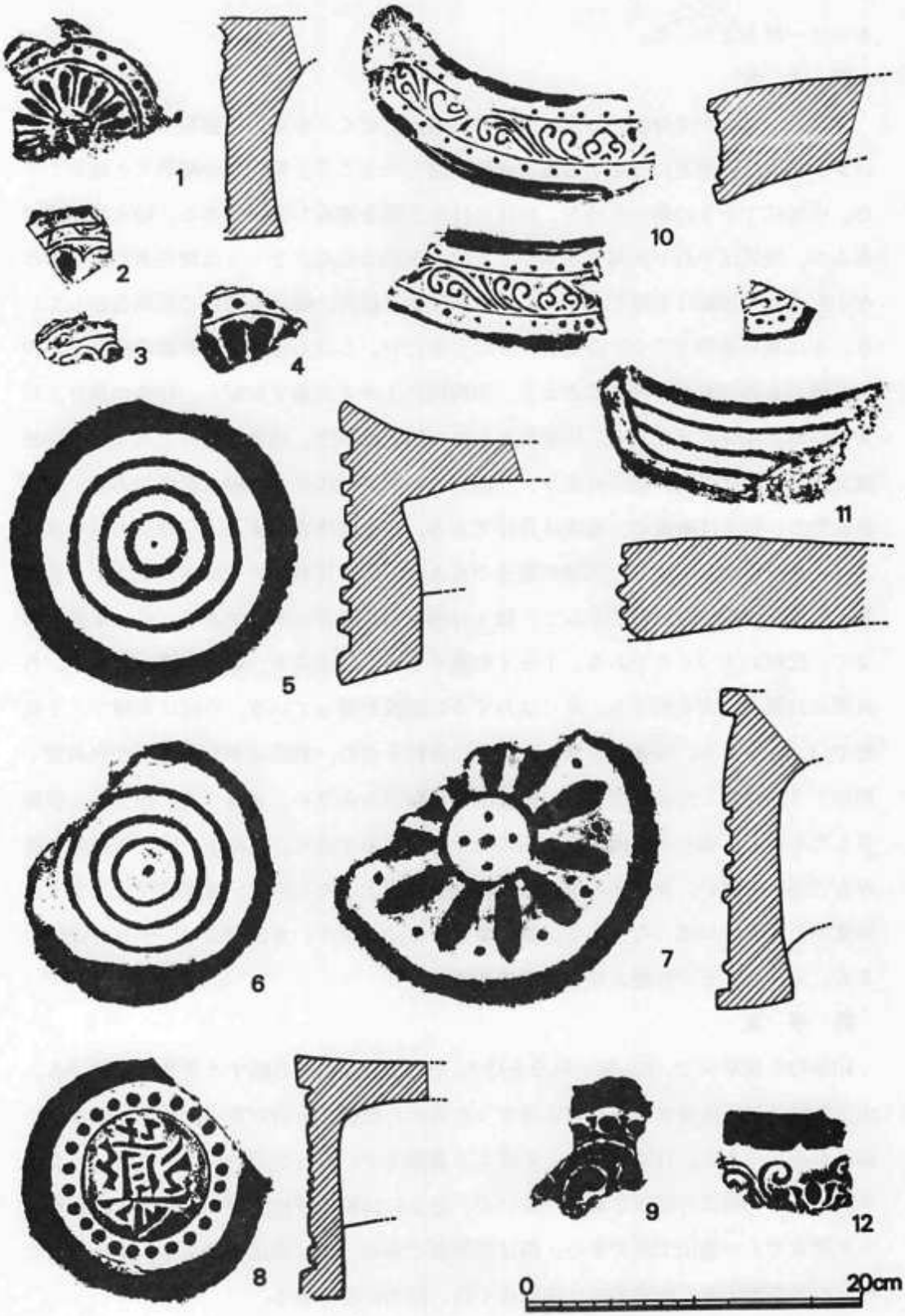
軒丸瓦　分類表

番号	瓦当面													個体数				備考
	直径	内区			弁区径	弁幅	弁数	外区広	外区									
		中房							内線		外線			第1次	第2次	計	%	
		径	形	蓮子数					幅	文様	幅	高	文様					
1	—	2.8	凹?	—	8.4	2.8	F8	2.7	1.3	S	1.4	—	—	0	3	3	8.8	復元推定による
2	—	—	—	—	—	—	F?	—	1.1	S	—	—	—	0	1	1	2.9	
3	—	—	—	—	—	—	F?	—	1.7	S	—	—	—	0	1	1	2.9	
4	—	—	凹	1＋4	—	1.4	T18	—	1.2	S	—	—	素	2	4	6	17.6	復元推定による
5	17.0	—	—	1	—	—	—	—	—	—	1.6	0.8	素	0	7	7	20.7	重圏文埋め
6	15.5	—	—	1	—	—	—	—	—	—	1.5	1.0	素	0	5	5	14.7	〃　埋め
7	19.0	6.0	凹	1＋4	15.0	4.5	T11	—	—	—	1.3	0.8	素	0	1	1	2.9	
8	14.4	—	—	—	7.8	—	—	3.3	1.6	S24	1.7	0.8	素	0	3	3	8.8	「鎮」字文
9	—	—	—	—	—	—	巴	1.7	1.8	S	1.7	0.5	素	0	7	7	20.7	巴　文

注：Fは複弁、Tは単弁、Sは珠文

軒平瓦　分類表

番号	瓦当面									個体数				備考
	上弦幅	下弦幅	弧深	瓦当厚	文様のさ	内区		外区		第1次	第2次	計	%	
						厚	文様	厚	文様					
10	27	29	6.0	6.4	0.2	2.7	均正唐草	1.6	S	2	8	10	28.6	
11	—	—	—	5.6	0.8	3.5	重弧文	1.0	素	8	10	18	51.4	
12	—	—	—	—	0.2	—	均正唐草	2.0	素	0	1	1	2.9	
その他不明のもの	—	—	—	—	—	—	—	—			6	6	17.1	



第6図　軒丸拓影実測図

ものは一枚もなかった。

軒　丸　瓦

1は瓦当部分が半分程でしかも表面の剝離がひどく、中房の状態等明らかにしがたいが、備後南部地方に分布する瓦と比較検討したところ、複弁8弁蓮華文と推定できた。中房に1＋4の蓮子を持ち、外区には珠文帯を巡らし素縁である。胎土は緻密であるが、焼成は不良で灰褐色を呈す。1片のみ出土した。2・3は複弁系の瓦であるが小片のため詳細は不明である。いずれも胎土は緻密、焼成も良好で灰黒色をしている。4は単弁蓮華文で小片の為明らかにしがたい。しかし現国分寺所蔵の出土瓦の中に同様のものがあり、それによると、中房内に1＋4の蓮子を配し、18弁の単弁と珠文帯の巡る素縁の瓦である。灰黒色をして、胎土は緻密、焼成も良好である。5は重圏文で、中心に1個の蓮子があり、三重の太い圏線が巡り、外縁は素縁である。黒褐色を呈し、胎土は緻密で、焼成は良好である。出土個体数が多く、下顎部の厚さは5.0cmとやや厚い。6は5と同様重圏文であるが、5と比較してやや径が小さく、各圏線も低く且つ細い。灰白色をして、胎土は緻密だが焼成は不良である。7は単弁蓮華文で、比較的大づくりである。1＋4の蓮子を持つ凹中房と、彫りの深い11弁で、各弁間に11個の珠文を配する。弁にはわずかに稜線が残っている。外縁は素縁で、下顎部で4.5cmを計る。茶褐色を呈し、胎土に砂粒を含む。焼成はやや不良で今次調査で初めて1個出土したのみである。備後南部に類例をみない。8は「薬」の文字を裏掘りしたもので、「薬」の外側には24個の大きな珠文帯が巡る。径は小さく、下顎部の厚みも2.6cmで薄い。第3区の焼けた瓦層中より出土したもので、戦国時代に本堂（薬師堂か）が火災に遭ったとする記録の裏付けができよう。9は巴文でいずれも破片である。その殆んどが砂層よりの出土である。

軒　平　瓦

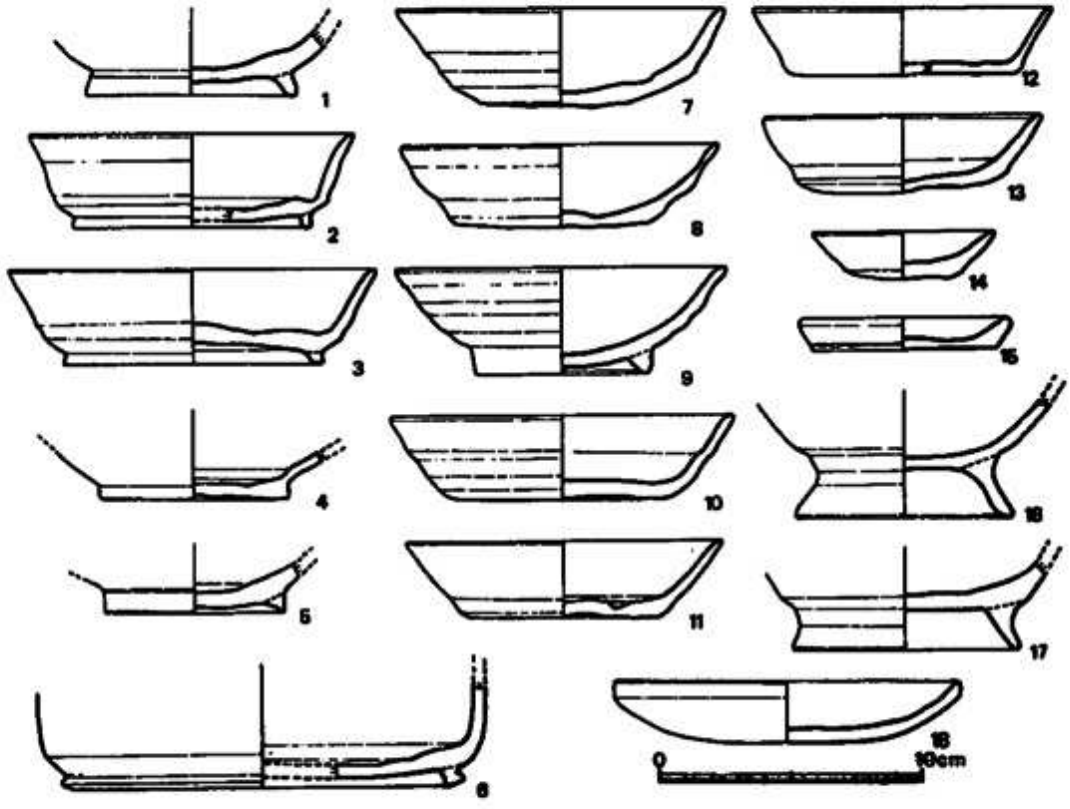
10は均正唐草文で、中心飾に を持ち、それより左右に3転する唐草文が延びる。上下外区には珠文帯が巡る。青灰色をした焼成の堅緻なものが多い。胎土は緻密で、顎は直線顎である。11は重廓文とも言える重弧文で、彫りの深い5本の弧線よりなる。灰黒色をした焼成の堅緻なものが多いが、胎土には粗い砂粒を含む。第1次調査も、今次調査でも一番出土量が多い。顎は直線顎である。12は均正唐草文で、中心部に大柄な唐草を配する。灰黒色で、焼成は不良、胎土は密である。

（鹿見　啓太郎）

2．その他の遺物

須 恵 器（第7図1～6）

遺構面上の褐色土層、砂層から出土している。高台の器形から2種類に分類することができる。　1は、底径 8.0cmの杯の底部で、青灰色を呈し、胎土は砂粒を多く含み、焼成は良好である。底面はへら切りであり、高台は貼り付けてあり、高さ 0.9cm、厚さ 0.6cmを測る。2・3は口径12～14cm、高さ 3.5cmの杯である。口縁部はやや薄くなりつつ外反している。青灰色を呈し焼成は良好で胎土は密である。底面はへら切りであり高台は貼り付けてある。4は、底径 7.2cmの杯の底部である。青灰色を呈し焼成は良好で胎土には多量の砂粒を含んでいる。内外面とも水ひき調整がなされ、高台はへら残しを削り出して作っており、高さ0.5～0.6cmである。底面はへら切りで、へら痕がみられる。5は、底径 6.8cmの杯の底部である。青灰色を呈し、焼成は良好で、胎土は少量の砂粒を含んでいる。内外面とも水ひき調整がなされ、底面はへら切りである。高台は貼り付けてあり、先端は尖っている。6は、底径15.3cmの盤の底部である。灰白色を呈し、焼成は良好で、胎土は少量の砂粒を含んでいる。内外面とも



第7図　須恵器・土師質土器実測図

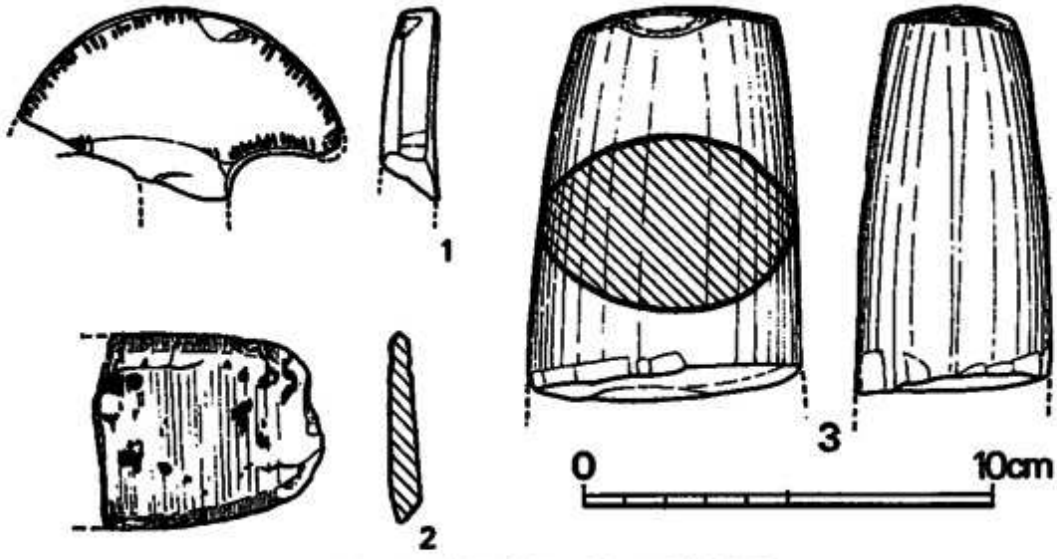
に水ひき調整がなされている。底面はへら切りで高台は貼り付けている。いづれも奈良時代末から平安時代にかけてのものと比定される。

土師質土器 （第7図7～18）

遺構面上の褐色土層、砂層から出土している。7・8は、口径12cm前後、高さ 3.0～ 3.7cmの杯身である。灰褐色を呈し、焼成は悪く、胎土は砂粒を多く含んでいる。内外面は水ひき調整がなされ、底は丸底に近くへら切りである。9は、口径12.5cm、高さ40cmの高台付きの杯身である。赤褐色を呈し、焼成は良好で、胎土は砂粒を少量含んでいる。底面はへら切りであり、高台は貼り付けてあり、高さ0.6～1.0cmを計測する。10・11は、口径12～13.2cm、高さ 3.0cm前後の杯身である。赤褐色を呈し、焼成はやや悪く、胎土は砂粒を多く含んでいる。内外面は水ひき調整がなされ、底面はへら切りで平底である。口縁端部がやや外反する。12は、口径11.4cm、高さ 2.6cmの杯身である。薄い赤褐色を呈し、焼成はやや悪く、胎土は少量の砂粒を含んでいる。内面は黒色をおびており、外面の一部、底面の一部も黒色を帯びている。内外面とも水ひき調整がなされ底面はへら切りである。13は、口径10.5cm、高さ2.5～2.9cmの杯身で、内面は赤褐色を呈し、外面はやや黒色を帯びている。焼成はやや悪く、胎土は石英粒、長石粒、雲母片を多く含んでいる。内外面は水ひき調整がなされ、底面はへら切りである。14・15は、口径6.8～8.0cm、高さ1.2～1.7cmの小皿である。赤褐色を呈し、焼成はやや悪く、胎土は密である。内外面は水ひき調整で、底面は板状のものに押しつけて、周辺をへらで調整したものと考えられる。16・17は、底径8.0～8.5cmの台付坏の台部である。いづれも赤褐色を呈し焼成は良好で胎土は密である。内外面とも水ひき痕が顕著である。18は、口径13.2cm、高さ 2.3cmの皿で、うすい灰褐色を呈し、焼成は良好で、胎土は密である。内面は、水ひき調整がなされており、指紋痕が見られる。外面は水ひき調整がなされ、底面はへら切りである。室町末～江戸期にかけてのものと推定される。

分銅型土製品 （第8図1）

表面は凸面、裏面はいくぶん凹面を呈する。厚さは、頭頂部 0.9cm、頭部中央で 1.3cmを計る。現存部は、頭部縁辺頂部から、頸部くりこみ部まで 4.9cm、頭部中央部幅 7.8cmを計る。頭部縁辺部から頸部くりこみ部にそって、ヘラ状工具によって刻み目を施し、文様帯を構成している。色調は、赤橙色を呈し、胎土は精選されている。焼成は良好である。



第８図　分銅型土製品・石包丁・石斧実測図

石　　器（第８図２・３）

遺構面より上層から石器が２点出土している。２は、磨製石包丁で、幅 4.7cm、厚さ 0.8cmを計る。刃部は、両面から磨いて調整している。両面とも、かなり剝落している。３は、磨製石斧で、刃部は欠落している。現長 9.7cmを計り、断面はほぼ楕円となっている。

（桧垣　栄次）

Ⅴ　ま　と　め

昭和48年度の備後国分寺跡の発掘調査は寺域付近一帯の５００分の１航空写真測量図の作成と寺域確認を主な目的として実施した。

寺域の確認と同時に昭和47年度において確認した基壇建物周辺の調査もあわせて実施した。しかし、２回におよぶ調査も家屋や耕作物および厚い砂の堆積などのため発掘はすべてトレンチによる部分的な調査にならざるをえなかった。このため、国分寺の大まかな寺域や伽藍配置をもつかむまでには至らなかった。しかし、今年度の調査によって部分的ではあるが、基壇建物跡３棟を確認することができたが、後世の建てかえや被災のため各遺構の遺存状態はあまりよい方とはいえない。

ここでは、とりあえず第２次調査の結果についてまとめておきたい。

南方建物基壇は、地山を削り出して基壇としたものであるが、その規模、内容は不明である。しかし、すぐ南に接して東西に走る道路が、古くより馬往還とよばれ延喜式に記されている山陽道といわれていることからすると南大門を想定することができる。もし仮りに南大門としても、両側にとりつくべき築地痕跡が確認できなかったので、今後他地点の調査とも関連して検討していく必要があろう。

なお、本基壇北面から、昨年検出した建物基壇中心までの距離は約70mである。

つぎに、東方建物基壇の積土は、地山をやや掘りこみ、その上に版築していることがうかがえた。積土も下半分は粘質土が互層となっているが上半は、黒褐色土が重なっており後補と想定される。トレンチ調査のため規模、性格は明確でないが、昨年検出した建物跡（金堂ないし講堂跡）との関係をみると建物跡東辺から本基壇東面までが約45mと短いので奥行の少ない南北棟などを想定すべきであろうか。

北方建物基壇は、礎石のある建物跡であることが確認された。後世の削平や火災にあっていることなどから規模、性格は明らかでないが、東西に並ぶ2つの礎石から柱間3m（約10尺）の建物であることが推定される。

出土する瓦は、室町期のものと比定され、また、軒丸瓦の中で瓦当面に「薬」字があるものがみられるので薬師堂のような建物があったのかもしれない。

寺域の四至については、一応南辺と西辺を想定することができた。しかし、南方建物基壇から北へ延びる線に伽藍中軸線を想定した場合、寺域西辺と推定した溝状遺構まで約１３０ｍとなり大きすぎるようであるので来年度以降の調査によって明らかにしていきたい。

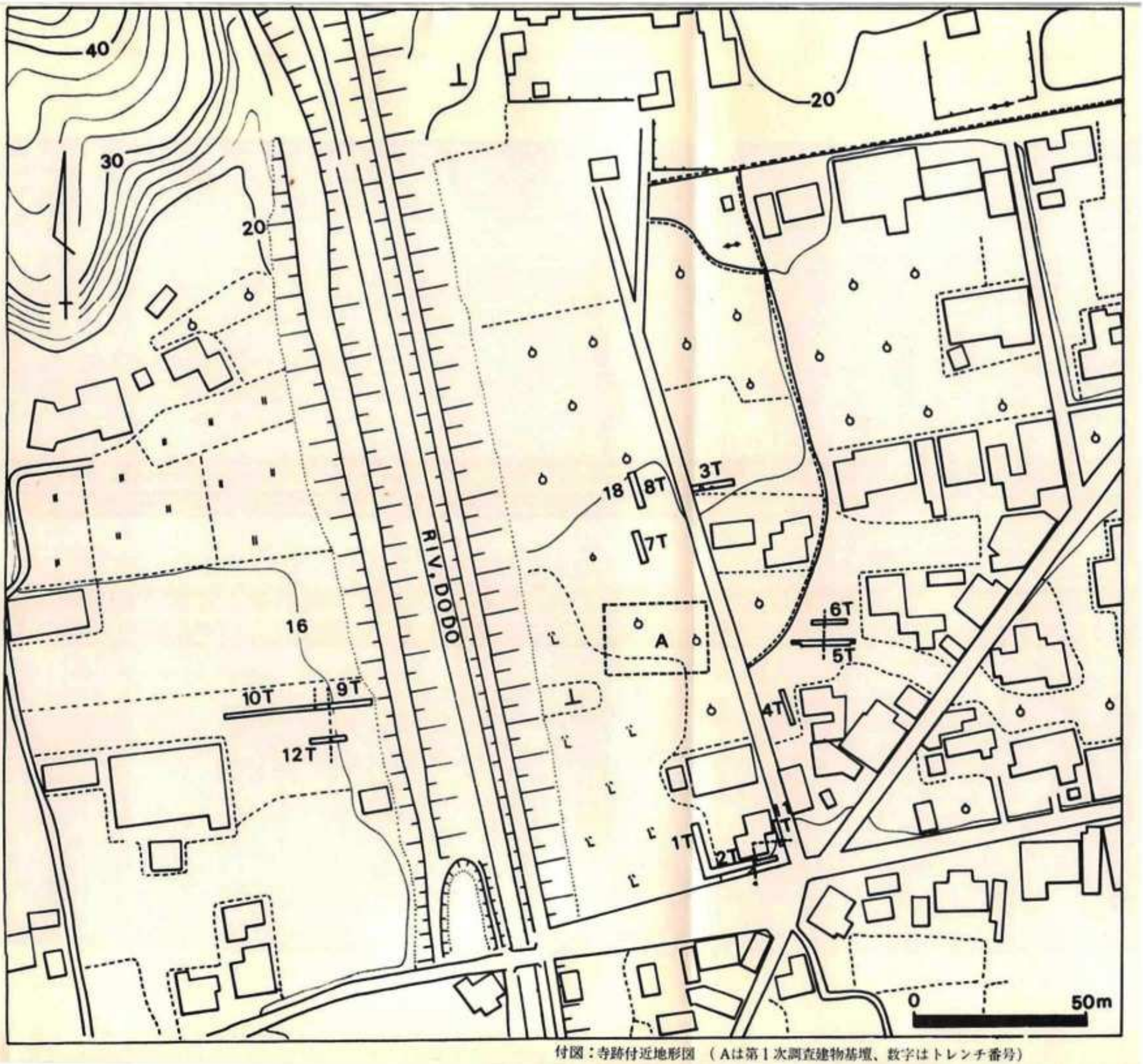
出土遺物については、瓦類や土器類が出土したが、量的には少ないといってよい。軒瓦では、以前から採集されていたものと同じ形式のものがほとんどであるが今回溝状遺構付近より1点だけ新しく素弁蓮華文軒丸瓦が出土した。この瓦に類似するものは、四国の伊予国分寺[1]、や阿波国分寺[2]から出土している。

以上、昭和48年度の調査の概要をのべてきたが、寺域や伽藍配置については、明らかでない点が多いので、来年度以降の調査によってしだいに明確にしていきたい。

（河瀬　正利）

注　1.「伊予国分寺発掘調査概要」（『愛媛の文化』第8号　1968）

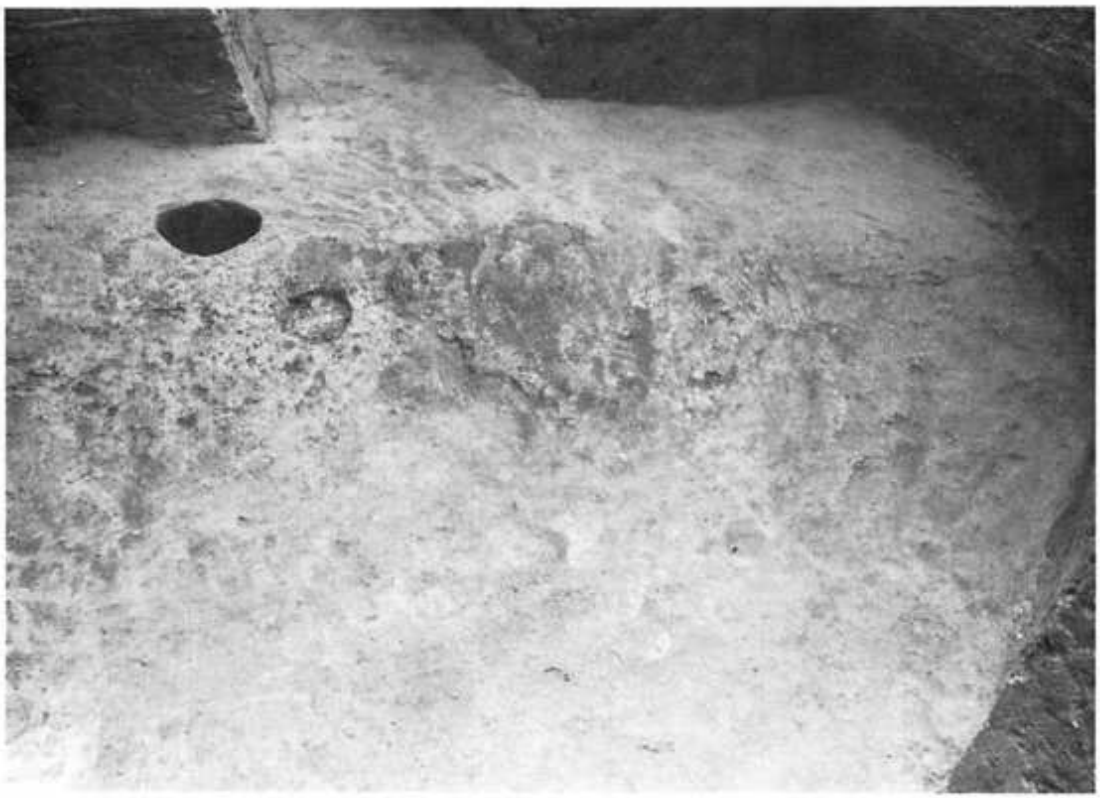
　　2. 松下正司氏のご教示による。



付図：寺跡付近地形図　（Aは第1次調査建物基壇、数字はトレンチ番号）

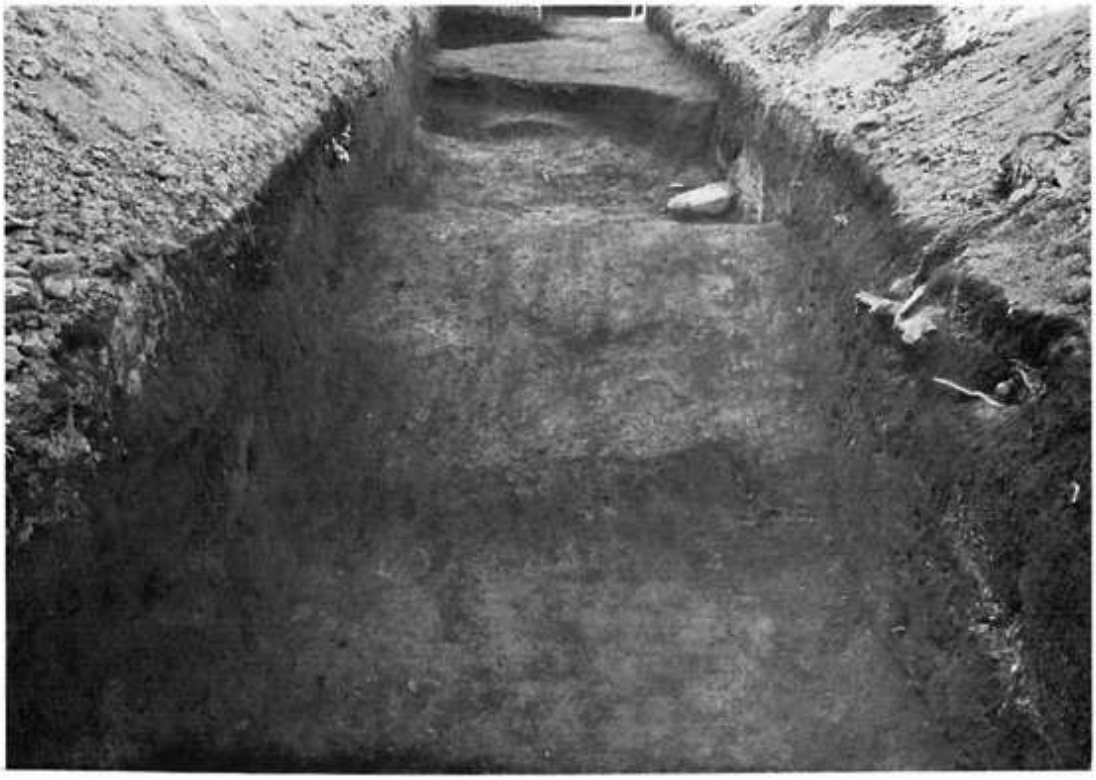
図版 1

a．南方建物基壇　（西より）

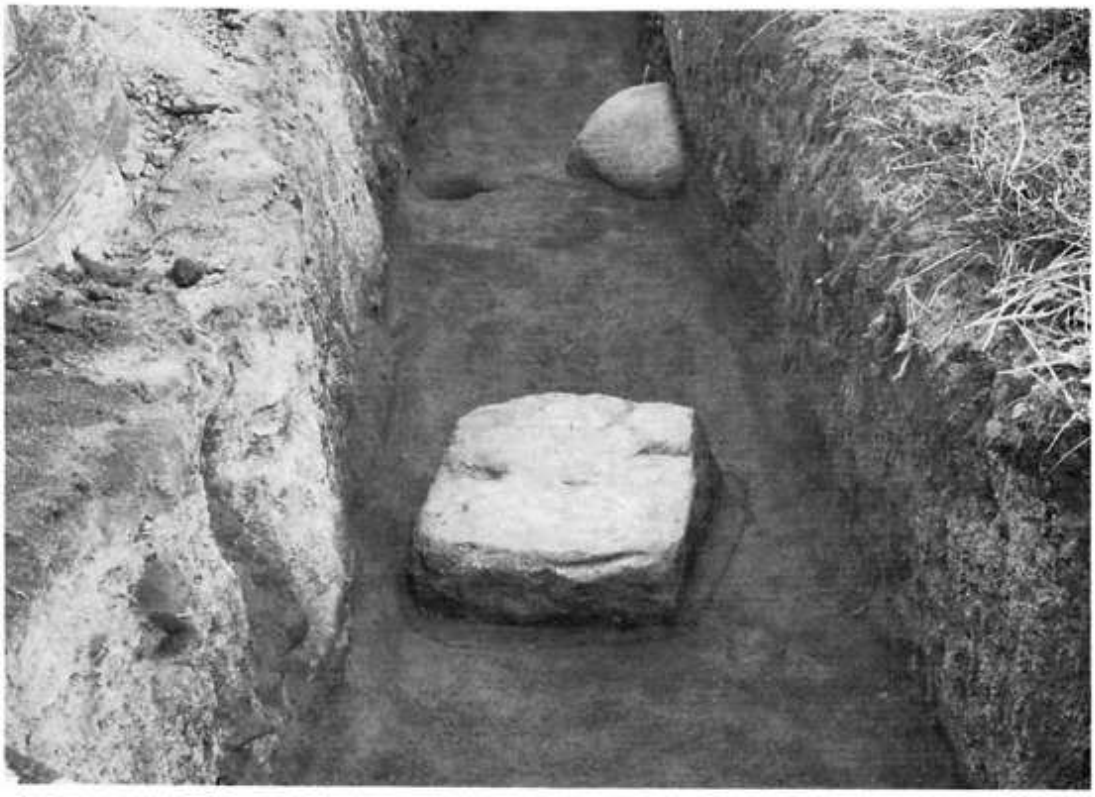


b．南方建物基壇

図版 2



a．東方建物基壇　（東より）



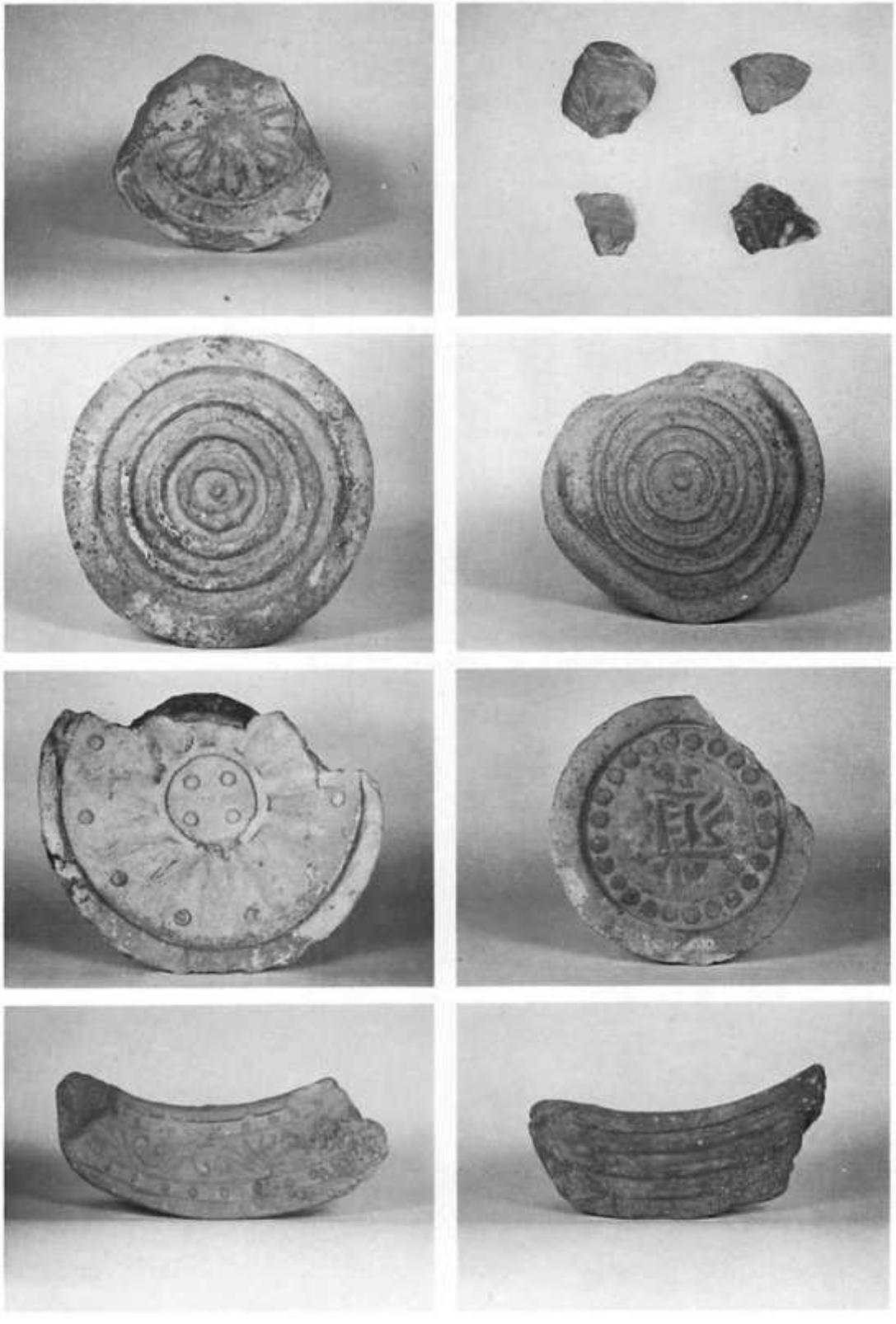
b．北方建物基壇　（西より）

図版 3

a. 第5区　瓦出土状態

b. 第9区　溝　状　遺　構

図版 4



軒　　瓦

昭和49年3月印刷

備後国分寺跡第2次発掘調査概報

編集・発行　広島県教育委員会

印　　刷　有限会社イマモト印刷